
空白の話 ~ジュカイ~

牛を飼う男

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

空白の話 ～ジュカイ～

【Zコード】

Z56570

【作者名】

牛を飼う男

【あらすじ】

樹海。そこは未知なる場所

女は借金の担保としてヤクザに捕えられる。ヤクザは体を売らない代わりにある依頼を女に持かけた。それは樹海の中で金品を探す事。

そこで見つけた一本のカセットテープ。そこに入っていたのは…。

『

あれ?

この声...違ってる

』

千の物語があれば千の解釈が生まれる

この話を聞いたあなたはどんな解釈をするだらうか

例えその解釈が不可思議だらうと

俺はただ物語を綴るだけだ

『空白の話 ～ジユカイ～』

『樹海…広大な森林。または自殺に追い込まれる状況』

渋谷六本木公園で白髪の男はベンチに寝転びながら、空に向かってタバコをふかしていた。

時間はお昼。子供達は家に帰り、大人達の姿も見えない。公園に生えている緑の木の隙間から青空を覗きながら、男はのんびりとベンチの上で昼寝しようと転がっていた。その風貌からしてホームレスと勘違いされそうである。

ピリリリ…ピリリリ…

軽快な機械音が聞こえる。ざつやう携帯の呼び出し音のよつだ。

「はい？ もしもし？」

女だ声からしてまだ若い。

男はうつとおしそうに目を閉じると横になつた。

「あつ？ レミー。最悪だよ。助けてよ」

友達か？

男は女の緊迫した状況に目が覚えてきた。

「実はさ……」

女は妙にテンションの高い声で自分の今ある状況を話し始めた…。

* * *

「あの…なんですか？」

女の一声はひどく間抜けな問いかけだつた。

「なんですか？ ジヤねえだろ？」

女を捕まえ、車で拉致した強面の男が一喝した。女はその一言でブルッと子犬のように震えた。

「おたくの彼氏？ 剥つていう名前だつけ？ つむに数百万借金しだまま、まだ返してくれないんだよね」

「はあ…」

「はあじゃねえんだよ…！」

強面の男はさらに一喝した。

「まあまあ。そんなに怒鳴りなさんな」

運転席の後ろの席に座っているいかにもヤクザといった感じの男が穏やかな声で言った。ちょうど女は後ろの席で2人の男に挟まれている状況だつた。助手席の後ろにいるのがさつきから怒鳴つている強面の男である。

「わたし…関係ないです…別れだし…」

女は目に涙をためながら震える声で言つた。

「それがねえ。あんた。連帯保証人の所に実印押してくるよな。わかる? 連帯保証人の意味?」

「…知りません」

「なんだとつ!? 知らずに押したのか!?!」

「すっすいません」

「まあ怒鳴るな。とりあえずお金を借りたら返さなきゃならない。これは常識だつてわかるね?」

「はつ、…はい…」

「それならお金を取りなきゃならない。君はお金を持つてるかい?」

「…もつてません…数百万なんて…」

「それじゃあ仕方がない。…どうするかわかるね?」

女は小さく首を横に振つた。

「まずは体を売るつてこと」

最悪な事態に女はさらりと首を横に振つた。

「そつ。それならもう一つ方法がある。君に宝探しをしてもらいたい

「…? 宝探し?」

「おい」

穏やかな男が運転手に声をかけた。

「…マジですかい? あそこに行くんですかい?」

「そうだ」

私は若い男と2人で自殺の名所とも言われる樹海へと足を踏み入れた。若い男は車の運転席で「なんで俺が」とぶつぶつ文句を言つてゐる。時計を見るともう夜中の23時だ。

「よし。ここでいいだろ?」

若い男は車を止めた。

「降りる」

私は車から降りるとブルッと寒さで震えた。今は12月25日。もうすぐ年始年末になる。

「このめでたい日になんでこんなことしなきやならないかねえ」

それはこっちのセリフだと思った。どうして別れた彼氏のためにタダ働きしなきゃいけないのか。

「じゃあこれ」

若い男は地図とコンパスと懐中電灯を私に渡した。

「これ……」

「宝探しだよ。この樹海には年間20人ぐらいの自殺者が入つてくるんだ。この辺りは電灯もないし、静かだし、観光地でもないからな。けつこう六場なんだぜ」

「はあ……」

「だから実際は100人ぐらいいるかもな」

「はあ……」

「警察もお手上げでね。氣味悪がつて所有者も見回りにこないわけ」

「あの……それで私は……」

「それで。自殺者の中には金目の物や財布があつたりもするわけだ。最新の自殺者だとクレジットカードが使えるかもしれないからな。まだ行方不明者としてリストに入つてないだろうし」

「……ほんとうにするんですか……」

「大体は想像してたる。ツベコベ言わず早く行つてこい！」

男は私の頭を叩くとさっさと車の中へと入つてしまつた。

渋々私は樹海の中へと入つていつた。金目の物つていつたって夕力がしれてると思ったが今は仕方がない。とにかく状況を見て逃げ出そう。

「さむ

樹海の中は冬なのにヒンヤリとしていて湿気深かつた。厚着している服の中にも冷たい空気が入つてくる。

枯れて落ちた木の枝がポキポキと音を鳴らす。そのたびにビクビクと肝が冷える思いだ。

「…あつ」

歩いて10分たつただろうか。鼻に嫌な臭いが入ってきた。この腐った臭いはもしかして…。

懐中電灯を臭いのする方へと向けてみる。すると視界に赤い着物が入った。スカートだったので女人の人かもしれない。

「…うつ」

赤い服を着ていたのはやはり女人の人だった。顔の皮膚から一ヨロニヨロと変な白い小さな虫が出てきている。懐中電灯を向けるとその虫は女人の体内へと引っ込んだ。

「マジかよ…ホントかよ…」

現実感がなかつた。映画で見るホラーのゾンビみたいだと思つた。だけどこれはリアルに氣色悪かつた。

私は懐中電灯を照らしながら女人の体を観察した。顔は絶対に見ないと誓いながら行つた。すると、指に赤い宝石のようなものが見えた。とりあえずもらつておこうと指輪を女からむしりとつた。あとはポケットの中に財布があつた。中身を見てみると12・934円しかなかつた。

「おう！」

車に戻ると若い男が手を挙げて待つていた。

「意外と早かつたじゃねーか。さすが若いつてだけあるねえ。これが中年だとビビッて逃げ出して行方不明になっちゃうんだよ」

「そうか…。この深い樹海の中からは確かに逃げ出すのは難しい。改めて今が絶望的な状況であることを知つた。

「さてと…ふむ…まあこんなもんだろ…。じゃ、次もよろしく」「えつ！？ まだやんの！？」

「あたりまえだ！ いくら借金があると思つてんだ！」

男は私を一喝すると車の中へと戻ってしまった。

仕方なく再び樹海の中へと入つていいく。さつきとは道をかえて探索してみる。30分ほど歩き回つたが何もでこない。

「…はあ」

徐々に状況に慣れてきたとはいっても寒くては効率が悪い。せめて夏にしてもらえないだろうか。というか私は呑気だな…。

キラリ

「うん?」

突然目の前が光った。懐中電灯を向けてみると地面から生えているような大きな岩の上に何かの機械がちょこんと置いてあった。

カセットテープ再生機だ。

『再生』と『録音』という表示があることから察するに何かを録音していたのだろう。少し躊躇したがとりあえず再生のボタンを押してみた。

『これは遺書だ』

ノイズと混じって男の声が樹海に響いた。

『俺は大学受験を失敗して10年間もの間フリーターをやつてきた。そして気づいた。自分が皆が言つ『普通』という状態にないことを。自分が当てはまらないことを』

淡々とした声だ。衝動的ではなく周到に準備していたのだろう。

『お前たちに聞きたい。『普通』とはなんだ? 何を基準にしてそういう言つてるんだ? :まあここで問い合わせをしたところで神様は答えてはくれまい。俺は死ぬことにする』

「カチッ」という音がしてテープが一旦切れた。そしてまた録音が再開されたようだ。

『12月25日。22時28分。樹海へと到着した。さすが自殺の名所だけあって陰湿な雰囲気が漂つている。薬と酒も持ってきたしここらでいいだろ。この不気味な樹海も死をまじかにするとまるで怖くなくなるものだ。薬が効いてきているので気分もいい。こんな気分で死ねるとは最高だな。それじゃ。さよなら』

「カチッ」。録音が終わった。あとはザワザワとこづ風の音だけだ。

結局遺書らしいことは言わず、自己完結で終わってしまった。それならせめてお金を残しておいてほしいものだ。

それにしても…。

私はキヨロキヨロと辺りを見回した。

どこにも遺体がないのだ。日付からして今日なのでまだ新しいはず。さつきみたいな腐乱死体に当たらなくてよかつたと内心ほつとしていたのだけれども…。

『23時2つの明るい光を見た』

「うわっ！？」

録音が終わつた思ったカセットテープからまた声が聞こえ始めた。そういえば再生を押したまま、まだ停止させていないことに気づいた。

『車のようだな…。また自殺者が来たのかと思つたが車の中からは若い女とヤクザっぽい男が出てきた。援助交際をするにしてもこんな場所で何をするのだろうか？』

淡々とした男の声。まだ生きていたのか。そして私達のことを見られていた事に気づいた。

カチッ

またテープが切れた。そしてすぐに再生される。

『女が死体から指輪と財布を盗んで男の所へと持つていった。そつか。彼らは泥棒なのか。そ…う…だったのか』

男の呂律が回つていない。もしかすると薬と酒が効いてきているのかもしれない。しかも私、尾行されていたのか。

それに…。

前と微妙に声が違うよつくな…。

そう『やよつなり』と言つた男と、今しゃべつてゐる男の声が少し違う

カチツ

『 そうだ。いい事思いついた。…あの女…連れて行け…一緒に』

』

「 くつ？」

どういう意味だろ？ 「 連れて行く？」 誰を？
自分の向かっている先に、不自然な形で置いてあつたカセットテープ。

そう。

まるで誰かが準備していたような感覚。

まさか。

ガサツ！

「 ぎやああああああ！……！」

私は思いつきり叫ぶとあのヤクザの元へと駆け出した。もはやヤクザだろうと何だろうと人であれば誰でもよかつた。とにかく助けてほしかった。

「 なつ！？ なんだ！？」

若い男は呑気に車の外でタバコを吸っていた。

「 はつ、早く！ 早く逃げよう！」

「 なにがだよ！ 落ち着きやがれ！」

「 あいつが！ あいつが来るのよ！」

「 誰が来るんだよ！」

「 」のカセットテープ！ あいつの声が録音されてたのよ… あつ

… まだ停止スイッチ押して…

力チツ

『逃がさないよ』

「…それで私パニくつちゃって。あのヤクザ置いてきちゃったのよ。もちろんヤクザの車を拝借してね。元彼に運転技術教えてもらつてよかつたわ〜。えつ！？ それよりこれから？ もちろん警察行くわよ。保護してもらわなきゃ。…もしもし。聞いてる？」

女の声が聞こえなくなった。ようやく一眠りできると白髪の男はベンチから起き上がった。すると、木の傍に誰かの携帯が落ちていた。

誰のだろうか？ わつきの女か？

とりあえず木に近づき携帯を拾つてみる。携帯の液晶画面には赤い血がべつとりとついていた。触つてみるとまだ新しい。

『捕まえた』

プツツ

携帯の通話が切れた。

その後に聞こえてきたのは木々のざわめきだけだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5657o/>

空白の話 ~ジュカイ~

2010年10月29日00時25分発行